

研究経過報告

村上 隆

1984年8月から1985年7月までの経過について述べたい。諸般の事情により、極めて多忙であったとはいえ、今ふり返ってみると、はなはだ非生産的な1年であったと言わざるを得ない。コマギレの時間をどのようにやり繰りするかが、最大の課題ということなのだが…。

1, 3相データの因子分析 昨年述べた多ブロック因子分析（これはもはや3相データの枠をはみ出しているのだが）については、本紀要に一応発表することができた。これと、3相データの解析法とを統合した形のプログラムも最近一応の完成をみた。これについては、若林研究室で行われた“組織パーソナリティに関する調査”のデータに適用し、ある程度の成果が得られており、近々それについては刊行・公表されるであろう。またこの間、幾人かの研究者による準3相因子分析の適用例が発表されたことはうれしく思っている。またSD法タイプのデータについては、大学院の廣岡秀一氏とともに、今年の日本文学計量学会大会において、若干の適用例を発表した。現在は、近年開発された一種のシミュレーションにもとづく推測統計の手法である bootstrap 法を用いて、推定されたパラメータの標準誤差を求める試みを行いつつある。これまで、3相因子分析に関連した手法は全く探索的レベルのもののみならず、標本論的議論は一切してこなかったが、強力な tool が得られたことで、今後この方向でも検討が可能になると思われる。

2; 外国人の日本語能力試験 昨年に引き続き、日本語教育学会による日本語能力認定試行試験に協力し、言語センター大坪一夫助教授（現筑波大学教授）とともに“外国人のための日本語能力認定試験に関する調査研究の経過報告V”を執筆した。この試行試験はこれで終了し、新たに昨年度から国家の水準で大規模に実施されることとなった“日本語能力試験”に調査員として参加、分析を担当している。そしてちょっとここに書き注すわけにはいかない、実にさまざまな（その一部はほとんど奇怪と言ってよいような）体験を今日まで続けている。

（試験そのものはきちんと作成、実施されており、特に大きな問題点があるわけではない。念のため。）今のところは、ほとんど偶然のいきがかりとは言え、このような巨大プロジェクトに参加することができたことに感謝し、引き続き努力したいという決意を表明しておこう。

その他、若干の共同研究に参加しているが、これらについては次年度以降に述べることにしたい。また、“研究”の名に値するかどうかは疑問であるが、“海保博之（編）心理・教育データの解析法10講 基礎編 福村出版”，“応用編”のあわせて3講（回帰・相関，因子分析，多変量分散分析）を執筆した。心理学における，データ解析について，筆者なりの見解をある程度盛り込みえたつもりである。もしお目にとまったら，ご批判を賜りたい。

研究経過報告——昭和59年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。この領域では、夢分析に関する論文を発表することができた。2事例とも母性喪失体験をもち、カウンセラー（治療者）とはほぼ同一年齢の男性ならびに女性のクライエントであった。（「心理治療過程に現れた治療者像とその機能（Ⅱ）」、名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——，第31巻，1—23頁，昭和59年12月）。

また依頼されてではあるが、カウンセリング・心理療法の方法論や展望に関して、つぎのような著書や論文をまとめることができた。一つは『カウンセリング』（講

座・サイコセラピー 1. 内山喜久雄・高野清純と共著，日本文化科学社，昭和59年11月，9—28，45—132，205—216，217—270の各頁）であり，文献展望をもとにまとめた概論書である。もう一つは，京都大学教育学部梅本堯夫教授の停年退官を記念しての出版に，「来談者中心療法—その現状と自己課題」（梅本堯夫編『教育心理学の展開』，新曜社，昭和60年4月，305—313頁）を分担した。これは筆者のカウンセリング・心理療法，特に来談者中心療法の理論的実践的研究の開始から今日に至るまでの自己展望を全体に3期に区分しての考察や，